CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

新入生の読書傾向と図書館利用についての意識調査

杉野　文代　　松村三千子

Survey of New Student's Reading Tendency and Understanding to the library

Fumiyo SUGINO, Michiko MATSUMURA

SUMMARY

For the students who have entered the Department of Nursing Science, without much experience of reading, the college library should be a "guide" to knowledge. However, their unfamiliarity of the library and lack in information retrieval skill form a big barrier to the usage of reference materials. In order to understand a rich store of knowledge and carry out researches into their own fields, the students have to know how to use the library effectively. For this purpose, what is necessary? What kind of instruction is required? We have conducted a questionnaire at the time of entrance into college in an attempt to find solutions to the problem.

Ⅰ. は じ め に

全世代にわたって読書離れが進む中[1]で、2001年12月には子どもたちの読書習慣を確立するために「子どもの読書活動推進法」[2]が制定された。最近の全国の小・中・高校生を対象とした「第49回学校読書調査」[3]（以下、「読書調査」と略記）によれば、2003年の５月一ヵ月間に一冊も本を読まなかった「不読者」の割合は、小学生9.3%、中学生31.9%、高校生58.7%で、高校生は前回よりも2.7ポイント増えているという結果であった。

一方、別の調査では、大学進学率の増加に伴って、大学で学ぶ準備が整っていない学生や高校までの情報教育がまだ確立しておらず、図書館利用スキルにバラツキのある学生が増加していることも報告されている[4]。

大学生は、自己学習などで図書館の利用や文献検索の機会が高校生に比べ多くなると考えられる。特に、看護学生は入学後、課題学習や実習、看護研究などのためにさまざまな文献資料を読むことが求められている。さらに、将来、専門職として、看護学という学問体系を発展させたり、その社会的評価を向上させるために専門領域での研究に携わることや、Evidence-Based Nursing（EBN、科学的根拠に基づく看護）[5]を実践することが求められている。そのためには、適切な文献検索と

活用、論文の読み方などの手法を身につけることが必要となる。

そこで、読書率が低下しているとされる世代である本学新入生の読書傾向と図書館利用状況を把握し、今後の図書館利用教育を考える基礎資料を得るために調査を実施した。

本研究の目的は、看護学生の入学時における図書への意識に他学科生と相違があるのか、またどのような違いが認められるのか、各学科生の特徴の有無などを明らかにし、効果的な図書館利用と文献検索方法を検討することである。

なお、**図書**（Book）とは、文字や絵、図表などを紙に印刷したものを冊子体に製本し出版された資料で、主題は問わず相当量の頁数を有し、一般には**本**と呼ばれ、書物、書籍、書などとも呼ばれるもの[6]と定義する。

Ⅱ．研　究　方　法

1．調査対象

2004年度の新入学生365名（内訳は、看護学科81名、幼児教育科99名、衛生技術科97名、健康文化学科88名）。

2．調査月日および調査方法

2004年４月５日～８日。各学科の図書館ガイダンスの時間に質問票を配布し、調査目的と倫理的配慮について説明の後、記入を求めガイダンス終了後に回収した。

3．調査内容

調査項目は、①読書の好意度、②一ヵ月間での本[6]の購入経験と購入冊数、③学校図書館の利用頻度、④公共図書館の利用頻度、⑤図書館での困った経験の有無と内容、⑥検索の手段、⑦よく読む雑誌、⑧今後読みたい本、⑨最も好きな本・印象に残った本、⑩本学の図書館への要望、などである。

4．回収数および回収率

回収数350名、回収率95.8%、有効回答数348名（内訳は、看護学科81名、幼児教育科99名、衛生技術科95名、健康文化学科73名）。

5．分析方法

統計ソフトはExcel太閤Ver.3を用い分析した。解析はχ^2検定を用い、有意水準は５%とした。検定にあたって、一部複数回答（MA）項目について上記ソフトによる単数回答（SA）変換「MA項目の各カテゴリーのうち対象とするカテゴリーをYes、その他のカテゴリーをNoとした２変数に変換。カテゴリー毎にクロス集計を実施、そのクロス表をもとに独立係数の算出及び検定をする方法」[7]を施した。

6．倫理的配慮

調査前に目的と自由意志による協力依頼であることを説明し、口頭で同意を得た。個人が特定されない無記名とすること、答えたくない質問には答えなくてもよいこと、データは統計的処理を行い研究以外には使用しないことを伝えた。

Ⅲ．結　　果

1．読書の好意度について

学科別に読書の好意度を表１に示した。

表１．学科別の読書好意度（上：実数　下：%）

	全　体	好きなほうである	どちらともいえない	好きなほうではない
合　計	348 100.0	129 37.1	146 42.0	73 21.0
看護学科	81 100.0	29 35.8	28 34.6	24 29.6
幼児教育科	99 100.0	43 43.4	48 48.5	8 8.1
衛生技術科	95 100.0	34 35.8	38 40.0	23 24.2
健康文化学科	73 100.0	23 31.5	32 43.8	18 24.7

＊（χ^2＝15.66、p＝0.0157<0.05）

全体では37.1%が読書好きという結果である。学科別では幼児教育科の43.4%が読書好きなほうである、と回答し、好きなほうではない、と回答したものも8.1%と他の3学科に比べて低く、入学生のなかで幼児教育科に特徴的な傾向と言えよう。

看護学科生は、読書好きと回答した割合が35.8%で衛生技術科と同率であったが、好きなほうではない、と回答した割合が29.6%と4学科の中で最も高かった。

表1についてχ^2検定を試みたところ、5%水準で有意であり（$\chi^2=15.66$、$p=0.0157<0.05$）、幼児教育科生は他学科生に比べ読書好きであるという傾向が認められる。

さらに、読書の好意度別に、学校の図書館利用経験の度合い、公共図書館の利用経験の度合いを表2、表3に示した。

表2．読書好意度別の学校図書館利用経験
（上：実数　下：%）

	全　体	よく利用した	利用した	ほとんど利用しなかった	全く利用しなかった
合　計	348	27	105	193	23
	100.0	7.8	30.2	55.5	6.6
好きなほうである	129	24	56	48	1
	100.0	18.6	43.4	37.2	0.8
どちらともいえない	146	1	37	98	10
	100.0	0.7	25.3	67.1	6.8
好きなほうではない	73	2	12	47	12
	100.0	2.7	16.4	64.4	16.4

＊＊＊（$\chi^2=74.23$、$p=0.00<0.001$）

表3．読書好意度別の公共図書館利用経験
（上：実数　下：%）

	全　体	よく利用した	利用した	ほとんど利用しなかった	全く利用しなかった
合　計	348	31	124	151	39
	100.0	9.0	35.9	43.8	11.3
好きなほうである	129	22	62	38	6
	100.0	17.2	48.4	29.7	4.7
どちらとももいえない	146	6	39	81	18
	100.0	4.2	27.1	56.3	12.5
好きなほうではない	73	3	23	32	15
	100.0	4.1	31.5	43.8	20.5

＊＊＊（$\chi^2=45.92$、$p=0.00<0.001$）

学校図書館では、読書好きと回答した学生の62.0%に利用経験があった。公共図書館については、読書好きと回答した学生の65.6%に利用経験があり、読書好きなほうではない学生も35.6%が利用していた。

ふだんから読書好きな学生は、学校図書館の利用経験も多く、公共図書館の利用についても同様と言える。いずれも0.1%レベルで有意であった。

また、調査時点までの一ヵ月間で本を購入した経験も読書好きのほうが多く、0.1%レベルで有意であった（表4）。

表4．読書の好意度別の本の購入経験
（上：実数　下：%）

	全　体	購入した	購入しなかった
合　計	348	112	228
	100.0	32.9	67.1
好きなほうである	129	69	59
	100.0	53.9	46.1
どちらともいえない	146	34	106
	100.0	24.3	75.7
好きなほうではない	73	9	63
	100.0	12.5	87.5

（不明は省略した）

＊＊＊（$\chi^2=43.84$、$p=0.00<0.001$）

購入冊数については、読書好意度との間に好意度の高いほうが購入冊数は多いという傾向はみられるものの、統計的には有意な関係は認められなかった（表5）。

表5．読書好意度と本の購入冊数（上：実数　下：%）

	全　体	1　冊	2　冊	3　冊	4冊以上
合　計	348	56	30	12	14
	100.0	50.0	26.8	10.7	12.5
好きなほうである	129	26	24	8	11
	100.0	37.7	34.8	11.6	15.9
どちらともいえない	146	24	4	4	3
	100.0	68.6	11.4	11.4	8.6
好きなほうではない	73	6	2	0	0
	100.0	75.0	25.0	0.0	0.0

2．学校図書館および公共図書館の利用経験について

本学入学までの期間に、学校図書館と公共図

書館をどの程度利用したかについて質問した結果を表6に示す。なお、学校図書館と公共図書館の利用度の相関係数は0.0234で、相関関係はない、と言える。

学校図書館では、「よく利用した」と「利用した」の合計が、衛生技術科は42.1%と多く、幼児教育科が41.4%、健康文化学科34.2%、看護学科32.1%の順であったが、統計的には各学科の間で有意な関係は認められない。

表6．学校図書館の利用経験(上：実数　下：%)

	全　体	よく利用した	利用した	ほとんど利用しなかった	全く利用しなかった
合　計	348	27	105	193	23
	100.0	7.8	30.2	55.5	6.6
看護学科	81	3	23	49	6
	100.0	3.7	28.4	60.5	7.4
幼児教育科	99	9	32	51	7
	100.0	9.1	32.3	51.5	7.1
衛生技術科	95	12	28	53	2
	100.0	12.6	29.5	55.8	2.1
健康文化学科	73	3	22	40	8
	100.0	4.1	30.1	54.8	11.0

同様に、公共図書館の利用度を表7に示した。

表7．公共図書館の利用経験（上：実数　下：%）

	全　体	よく利用した	利用した	ほとんど利用しなかった	全く利用しなかった
合　計	348	31	124	151	39
	100.0	9.0	35.9	43.8	11.3
看護学科	81	8	26	35	12
	100.0	9.9	32.1	43.2	14.8
幼児教育科	99	8	35	47	6
	100.0	8.3	36.5	49.0	6.3
衛生技術科	95	14	40	35	6
	100.0	14.7	42.1	36.8	6.3
健康文化学科	73	1	23	34	15
	100.0	1.4	31.5	46.6	20.5

＊＊（χ^2=22.5、p=0.0074<0.01）

「よく利用した」と「利用した」の合計は衛生技術科56.8%、幼児教育科44.8%、看護学科42.1%、健康文化学科32.9%で、ここでも衛生技術科の利用経験が他の学科に比べて高いことがわかる。

公共図書館の利用と学科の間には1%レベルで有意な関係を認めた。

3．図書館利用に際しての障壁

図書館を利用する際に、人によっては、さまざまな障壁を感じるものであるが、過去の図書館（学校図書館、公共図書館ともに）の利用経験で困ったことはなかったかを質問した。

全体の19%近くが、何らかの不便や不満を感じている（表8）。学科の間での有意な関係は認められなかったが、図書館利用経験の多い衛生技術科では27.7%で不満や不便を多く訴えている。

表8．図書館での困った経験（上：実数　下：%）

	全　体	あった	なかった
合　計	348	60	260
	100.0	18.8	81.3
看護学科	81	9	68
	100.0	11.7	88.3
幼児教育科	99	17	74
	100.0	18.7	81.3
衛生技術科	95	23	60
	100.0	27.7	72.3
健康文化学科	73	11	58
	100.0	15.9	84.1

過去に経験した困ったことの内容をフリーアンサーで求めた。その内容のうち全学科に共通していた主な事柄を以下に抜書きした。

（　）内は各学科の回答数である。

①（探していた）必要な本がない（衛生5、幼児4、健康3、看護2）、②本のある場所がわからない（幼児6、衛生3、健康3）、③本の保存が悪い（汚い、欠損がある）（幼児3、衛生2、看護1、健康1）、④パソコン検索がわからない（看護2、健康2、幼児1）などが挙げられている。

4．調査する手段

何かを調べる時の手段としての図書館の位置付けについて、学科別の回答を表9に示した。

各科共通して「インターネットで検索する」が一番多く、2番目は「誰かに聞く」であり、調べる手段としての図書館の位置付けは低い。

表9．調べる手段（上：実数　下：%）

	全　体	図書館で調べる(a)	インターネットで検索(b)	誰かに聞く	専門のところへ問い合わせする
合　計	348	75	249	216	14
	100.0	21.6	71.6	62.1	4.0
看護学科	81	13	63	45	4
	100.0	16.0	77.8	55.6	4.9
幼児教育科	99	23	69	70	3
	100.0	23.2	69.7	70.7	3.0
衛生技術科	95	29	75	53	4
	100.0	30.5	78.9	55.8	4.2
健康文化学科	73	10	42	48	3
	100.0	13.7	57.5	65.8	4.1

（その他は省略した）

(a)＊（χ^2=8.80、p=0.0320<0.05）

(b)＊（χ^2=11.31、p=0.0102<0.05）

この回答はMAであったので、SA変換[7]を施し、学科別、項目別に検定したところ、「図書館で調べる」（χ^2=8.80、p=0.0320<0.05）、「インターネットで検索する」（χ^2=11.31、p=0.0102<0.05）の2項目と学科の間に有意な関係を認めた。

「図書館で調べる」項目は衛生技術科、幼児教育科が多く、「インターネットで検索する」項目は衛生技術科、看護学科が多いという傾向がある。

資料検索手段は、前述の読書好意度別でも有意な関係がみられる（表10）。

表10．読書好意度別の調べる手段（上：実数　下：%）

	全　体	図書館で調べる(a)	インターネットで検索(b)	誰かに聞く	専門のところへ問い合わせする
合　計	348	75	249	216	14
	100.0	21.6	71.6	62.1	4.0
好きなほうである	129	44	106	77	7
	100.0	34.1	82.2	59.7	5.4
どちらともいえない	146	21	98	92	6
	100.0	14.4	67.1	63.0	4.1
好きなほうではない	73	10	45	47	1
	100.0	13.7	61.6	64.4	1.4

（その他は省略した）

(a)***　(b)**　（SA変換による）

ただし、(a) χ^2=19.13、p=0.0001<0.001

(b) χ^2=12.07、p=0.0024<0.01

すなわち、読書が好きなグループは、資料検索に図書館とインターネットを多く利用し、「どちらともいえない」、「読書は好きなほうではない」と答えたグループは図書館の利用が少なく、インターネットに偏った資料検索の傾向がある。

5．よく読む雑誌とこれから読みたい本

ふだんから接している雑誌や情報誌について質問した結果を表11にまとめた。205件あったが、自由記述のため雑誌・情報誌名とジャンルとが混在した回答になっていた。

雑誌・情報誌名では「non-no」が62件と最も多く、次いで「JJ」、「mina」、「zipper」、「vivi」などが挙げられていた。ジャンル別（表中、二重線以下の欄）でもファッション雑誌と記入したものが36件あり、ファッション系の雑誌がよく読まれていることがわかる。

学科別に差はなく、新入生が日常接触している情報は、ファッション誌からのものが圧倒的に多いことを示している。

表11．ふだん読んでいる雑誌・情報誌（件数）

雑誌・情報誌名	(205)
non-no	62
JJ	22
mina	16
zipper	9
vivi	9
ray	6
more	5
mini	5
kobe walker	5
少年ジャンプ	5
with	4
cancan	3
ps	3
seda	3
サライ	2
st、soup、装苑	各1
ファッション雑誌　（と記入）	36
映画雑誌　（と記入）	3
音楽雑誌　（と記入）	2
スポーツ雑誌　（と記入）	2

（ローマ字誌名は全て小文字で表記した）

さらに、これから読んでみたい本についての

回答を表12に示した。

表12-1．これから読みたい本（件数）

看護学科	(53)	衛生技術科	(28)
小説(日本・外国)	28	小説(日本・外国)	11
看護、医療の本	**13**	趣味関連の本	4
心理学の本	2	**専門に関する本**	**3**
ノンフィクション	2	ノンフィクション	3
地理の本	1	哲学の本	1
歴史の本	1	心理学の本	1
料理の本	1	物理の本	1
		伝記	1
		エッセイ	1
		経済の本	1
役に立つ本(と記入)	3	感動する本(と記入)	1
面白い本　(と記入)	2		

表12-2．これから読みたい本（件数）

健康文化学科	(28)	幼児教育科	(50)
小説(日本・外国)	11	小説(日本・外国)	24
趣味関連の本	4	**幼児教育の本**	**12**
エッセイ	2	絵本	2
ノンフィクション	2	歴史の本	1
心理学の本	2	心理学の本	1
地理の本	1	詩	1
美術関連の本	1	エッセイ	1
旅行関係の本	1	趣味関連の本	1
		料理の本	1
		語学（英語）の本	1
面白い本　(と記入)	3	感動する本(と記入)	3
感動する本(と記入)	1	面白い本　(と記入)	2

回答した件数は、看護学科53件、衛生技術科および健康文化学科が共に28件、幼児教育科は50件であった。各科別の一人当たり回答件数は、看護学科0.65件、衛生技術科0.29件、健康文化学科0.38件、幼児教育科0.51件であった。「特になし」、「無回答」の多いことが目をひく。この項目でも自由記述のために、「小説」や「心理学」などのジャンル別と「感動する本」、「面白い本」（表中、二重線以下の欄）で挙げたものとが混在した回答であった。

表12のジャンルの分類にあたっては「読書世論調査」[8]の分類を参考にした。「小説」には、芥川賞作家のものから『ハリー・ポッター』シリーズまで硬軟とりまぜて回答があったが、一括して「小説」に分類してある。

なお、各科で専門関係のジャンルを回答したものを太字で表記した。

6．最も好きな本や印象に残った本

これまで読んだ本の中で、最も好きな本や印象に残った本について質問したところ、全体で、188件の回答が得られた。挙げられていた中で、2件以上のものを以下にまとめた。（表13）

表13．好きな本・印象深かった本（件数）

書　　名	(124)
ハリー・ポッター（シリーズ）	25
"IT（それ）"と呼ばれた子	24
世界の中心で、愛を叫ぶ	16
だから、あなたも生きぬいて	10
五体不満足	9
Deep Love	7
十二番目の天使	6
青の炎	3
十二国記	3
盲導犬クイールの一生	3
太陽の子	2
アルジャーノンに花束を	2
ハッピーバースデー	2
ノルウェイの森	2
リハビリメイク生きるためのわざ	2
トットちゃんとトットちゃんたち	2
さくらももこの本	3
村山由佳の本	3

（1件のものは省略した）

最も多かったのは、『ハリー・ポッター』シリーズで、次いで、『"IT（それ）"と呼ばれた子』、そして、『世界の中心で、愛を叫ぶ』、『だから、あなたも生きぬいて』、『五体不満足』、『Deep Love』と続いていた。また、作家では、さくらももこ、村山由佳が各3件で、その他には江國香織、田中芳樹、倉橋耀子、佐藤さとる、ラルフ．イーザウらの名前が挙がっていた。

回答された本についてみてみると、原作本や映像が大ヒットした『ハリー・ポッター』以外にも、話題になった映画・ドラマの原作やノベライズ版などが多いことがわかる。

学科別にみると、幼児教育科では、児童書や

絵本のジャンルが多く、看護学科では、『看護婦だからできること』、『白衣の天使になりたい』、『白い巨塔』、『複合汚染』、『自傷する少女』、『高瀬舟』、『光とともに』、『ホスピス』など、医療や看護に関連した本が挙げられていた。

Ⅳ. 考　　察

今回の調査で、読書の好意度および図書館の利用経験の結果をみると、全体として約4割の新入生が読書好きで図書館の利用経験もあることが明らかになった。

看護学科では、読書好きの学生のほうが好きではない学生の割合をわずかに上回っているものの、好きではない、と回答した学生が4学科の中で最も多かった。また、学校図書館をほとんど利用しなかった、あるいは全く利用しなかった、が7割、公共図書館を利用しなかった学生の割合も6割近くにのぼっていた。これらのことから、看護学科を含め本学新入生の図書や図書館への関心は高くないことが伺われる。

読書は、「すべての活動の基盤である教養や価値観、感性などを生涯を通じて身に付けていくために不可欠なもの」[1]である。

先の「読書調査」では、読書の勧めと読書量は関連性があり、教師や家族による読書の勧めが小・中・高校生の読書量にかなりの影響力を与えていることが報告されている[3]。よく読書をする高校生の13%が教師からの勧めによると回答していることから、新入生に対しても同様に、図書への親しみや効果的な図書館利用を意識づけていくような教員の関わりが有効であると思われる。

ふだんの読書についての回答をみると、学生は映像化されたものや話題性の高さなどで本を選ぶ傾向がみられた。これから読みたい本や最も好きな本で、『ハリー・ポッター』シリーズが高い支持を得たのは、原作本が大ヒットしただけでなく、映画、ビデオ、DVDなど映像との相乗効果によるところが大きいと言える。「読書調査」でも、高校生が一ヵ月に読んだ本ベスト5で、『ハリー・ポッター』シリーズ、『“IT（それ）”と呼ばれた子』、『青の炎』、『だから、あなたも生きぬいて』、『Deep Love』、『十二番目の天使』などが挙げられている[3]。

また、高校3年の女子がふだん読んでいる雑誌についての調査[3]では、「non-no」が1位で、以下、「zipper」、「少年ジャンプ」、「mini」、「vivi」などがベスト10に挙げられていた。高校3年男子の1位は「少年ジャンプ」であるが、4位と5位、8位にファッション誌が入っており、男女共にファッション誌の読者が多いと報告されている。本学の新入生がよく読む雑誌でもファッション誌が大半を占めており、この調査結果と同様の傾向がみられた。

映像時代に育ち、流行に敏感でファッションに高い関心を持っている学生に対しては、映像や音声を活用した教材の開発や使用法の工夫により、専門書への導入を容易にするような環境を整え読書意欲を喚起していく必要がある。

また、図書館利用の障壁として、必要な本がない、本のある場所がわからない、パソコン検索がわからない、などがあげられていることから、検索語など基本的な図書検索方法については早期に指導をすることが必要と考える。

何かを調査するための手段で、「インターネットで検索する」が最も多かったことは、情報化社会の中心的役割を担っているコンピューターが現代の学生たちにとって身近な存在になっていることの現れと捉えることができる。

高校生は分からないことや疑問があった時にどのように対処しているのかを調査した結果[3]では、1位は「友達に聞く」で55.2%、「辞書・辞典や参考書で調べる」が16.3%、「家の人に聞く」9.6%、「学校や塾の先生に聞く」7.8%、「コンピューターで調べる」が3.5%となっていた。しかし、「そのまま何もしない」と回答した高校生も5.3%にのぼることが報告されている。本調査結果で

「インターネットによる検索」が高かったことは、誰もが、手軽にアクセスでき直ちに数多くの情報が得られるという利便性に負うところが大きいと考えられる。インターネットは、レファレンス・ツールとして今後、ますます活用されていくことであろう。しかし、インターネット検索に際しては、ネット上の情報の質には大きな差があることにも注意を促す必要がある。ネット上には誰もが自由に情報を発信することができるため、誤った情報や不確かな情報も数限りなく公開されているからである[9]。

ネット上の情報の信頼度を見抜く力を身につけるには、手間や時間がかかっても信頼度の高い専門書や論文に数多く接する経験が必要である。特に、入学時点でインターネット検索に依存する傾向がある看護学生には、早期に専門書との接触を促し、情報リテラシー能力を高めなければならない。調べる内容や時と場合により、一番有効な方法は異なってくるが、多種多様な検索手段を知り、臨機応変に使いこなせるような指導が求められている。

松本ら（2003）は、看護大学の3年生に文献検索のプログラムを実施した時、学生から、「最も看護学への期待が大きい1年生の時に受けておきたかった」という意見があったと報告している[10]。「やる気はあるが、何をしたらよいのかわからない、またスキルも未熟なので空回りしてしまう。それだけに、早いうちに学習に必要な情報収集のスキルを身につけておくとよいのではないか」[10]という学生の意見は、適切な指導方法と実施時期を考える上で参考になると思われる。授業で、情報収集と文献検索を必要とする課題を設定し学習させていくことも一方法である。

中山（2003）が、「看護の知は、過去の研究を丹念に辿る努力なしに積み重ねることはできない。看護学の知の体系化において図書館の果たす役割は大きい」[11]と述べているように、学生が、図書館でさまざまな文献を収集し、検討することなどを通して情報検索手法を身につけ、エビデンスの高い情報を効率的に検索できるように支援していく必要がある。

今回の調査では、図書館の利用経験に関して、読書好きなほうではない、と回答した学生の19.1%が学校図書館を、35.6%が公共図書館を利用していたことについての分析はできていない。図書館の利用頻度だけでなく、利用時の図書貸出しの有無やどのような目的で利用しているかなどについても調査項目に加えるべきであったと考える。また、月平均の読書量は問うていないため、今後、読書量と読書の好意度や図書館利用経験との関連性についても検討する必要がある。併せて、入学時の調査だけでなく、学年の進行に伴う図書への意識の変化や図書活用状況についても経時的にみていくことが今後の課題としてあげられる。

V. 結　　論

本学新入生の入学時における読書傾向と図書館利用に対する意識調査を実施し、以下の結果が得られた。

1．全体では、37.1%の学生が読書好きであると回答していた。幼児教育科は、他学科に比べ読書好きの学生が多く、公共図書館の利用経験は、衛生技術科生が他学科に比べて多いという学科による特徴が認められた。
2．調査をする手段としては、「インターネット検索」と「誰かに聞く」が多かった。読書好きグループは、図書館とインターネットを活用し、読書好きでないグループは、図書館の利用が少なく、インターネット検索に偏る傾向が認められた。
3．よく読む雑誌ではファッション誌が多く、これから読みたい本や最も好きな本では、原作本のヒットや映像化などで話題を呼んだものが多かった。看護学科生は医療や看護、幼児教育科生は幼児教育に関連した本も挙げていた。
4．看護学科生は、読書好きが35.8%、好きなほ

うでない、が29.6%であった。図書館の利用経験は、学校図書館32.1%、公共図書館42%で、衛生技術科、幼児教育科に比べて低く、また「インターネット検索」に依存する傾向がみられることから、図書への関心や図書館活用スキルを高めていく必要性が示唆された。

今回の調査にあたりご協力いただきました神戸常盤短期大学図書館の石川明子さんと中山裕佳子さんならびに2004年度入学生の皆様に深謝いたします。

文　　献

1）「2003年8月22日　文部科学省文化審議会国語分科会読書活動等小委員会の意見のまとめ」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/0309120.htm（2004年9月6日アクセス）
2）「子どもの読書活動の推進に関する法律」平成13年12月12日法律第154号
3）毎日新聞社：『読書世論調査2004年版』、64－86、毎日新聞社、2004.
4）青山弘：「授業と連携した」図書館ガイダンスの可能性―岐阜大学の事例を中心に―、大学図書館研究　第65号、59－66、2002.
5）日野原重明監：「基本からわかるEBN」、85－103、医学書院、2001.
6）図書館情報学ハンドブック編集委員会編：『図書館情報学ハンドブック　第2版』、202、丸善、1999.
7）菅民郎：『アンケートデータの分析』、99、現代数学社、1998.
8）前掲書3）、19
9）中村百合子・芳鐘冬樹：インターネット時代の学校図書館員の情報検索、情報の科学と技術52巻12号、624－633、2002.
10）松本直子・馬渡淳子：聖路加看護大学図書館における利用教育サービスの展開、看護と情報Vol.10、90－103、2003.
11）中山洋子：看護研究と知の体系化：看護系図書館の果たす役割、看護と情報Vol.10、66－71、2003.
12）安達　勉：利用指導の実状―短期大学・高等専門学校―、現代の図書館Vol.32、1994.
13）井上幸子・平山朝子・金子道子：看護学体系第10巻　看護における研究　第2版、日本看護協会出版会、2001.
14）前島重方・志保田務他編：新·図書館学シリーズ1『図書館概論』、樹村房、1999.
15）望月整子：所蔵資料の看護研究への利用実績と課題―山梨県立看護大学・山梨県立看護短期大学部図書館の例―、看護と情報Vol.10、2003.